

PTA全国大会（広島県）参加 報告

8/25（金）第3分科会 13:00～16:00

研究課題：学校教育と地域の連携をどう進めていくか

～子供の成長を地域と共に～

★基調講演 山川 肖美（広島修道大学 教授）

『地域とともにある学校ーシビックプライドによる架け橋ー』

長い間、学校は、在学する子どもたちが教育を受ける場であり、その教育をおこなうのは、その学校の教員だと認識されてきた。ところが、2018年から順次導入されてきた現行の学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」を基本理念としているため、よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を作るという目標を学校と社会で共有することが目指される。

⇒学校運営には地域社会全体で関わるべき

社会：学校にある地域の人々（自治会）、地域にある法人・団体

●CS（コミュニティスクール：地域社会全体で運営される学校）実現のために

重要なこと

①中心的に関わる人以外がフリーに参加しやすい組織・運営

②シビックプライド（地域への愛着・誇り、地域社会運営への当事者意識）の醸成

★実践発表 立石 克昭（府中市CS連絡協議会会長）

『地域の中に学校を、学校の中に地域を』

現在、子供たちに求められることは多様化しており、学校だけで教育する時代は終わった。学校と地域が一体となって地域の子供たちを育てていく。その取り組みの中で子供たちが地域の魅力を知り、地域活性化につなげることが大事。学校も地域も、WIN/WINの関係がCS継続のカギ。地域企業の魅力意を伝えることも大事。企業家として、学校のキャリア

教育の支援に取り組む。地域社会が学校運営に参画することは、ボランティアではなく、地域の将来のための投資。

●CSを支える『学校運営協議会』として重要なこと

①学校が作成する運営方針に『OK』を出すのではなく『Let's』(一緒に取り組む)

②運営協議会が主体となる、定例会(例月1)の開催

(教頭ではなく協議会が会の運営)

③運営協議会員が、学校管理職のみならず、担任・クラスのと関わり、行事・授業運営を行っていく。

④教員は異動がある。「先生は風の人、地域は土の人」。風土両方で学校を支える

感想(館下)

●CSとしての渡津小の現状

少子高齢化⇒少ない児童をたくさんの大人で様々な形で見守ろう

- ・わたづ広場(学習の指導) ・見守り隊(登下校の安全支援)
- ・街歩き、芋ほり体験等校外学習の支援

⇒仕事に出る親世代の代わりに児童を支えるシニア世代がたくさんいる

●今後の課題

- ・上記活動を支えるボランティアが高齢の方が多いため人手不足が進行
(見守り隊のいない登校班もあり)
- ・地域と児童保護者の認識の違い
(地域「親や児童からの感謝の気持ちが感じられない・・・」
児童保護者「児童の行事は児童だけで・・・(地区民運動会等)」)
- ・地域の有志のシニアのみが学校運営に関わっている

(地域社会のあらゆる人、より幅広い年齢層、法人、団体が学校運営に関わるのがCS)

●今後の課題解決のために必要なこと

- ①現在の学校支援委員会（自治会各団体代表、PTA代表で組織）から、CS学校運営協議会（学校と地域の各団体・法人・住民で組織）に拡大するために、CSコーディネーター（学校と地域の各法人・団体・住民のつなぎ役）を然るべき立場を持つ人材が担うこと。

(自治会長？コミュニティセンター長？学校長？学識経験者？地区選出議員？教育委員会？)

- ②CSを目指した学校運営の中で、学校がよくなるだけでなく、それに関わる地域の各団体・法人・住民に、実質的或いは心理的報いがあること。

(立石氏「CS運営は学校・地域が『WIN/WIN』に」)

8/26 (土) 全体会 8:30~12:30

基調講演：黒川 伊保子

(株) 感性リサーチ代表取締役、『妻のトリセツ』等著書多数

『心のトリセツ～「逃げ癖」を「意欲」に変える脳科学～』

急激な変化が予想される今後の社会情勢を乗り切るために、保護者も子供も新たな学びが必要がある。学びを支える大きな柱は、時代の変化に対応し、困難に直面してもあきらめず、自らを変えていこうとする意欲である。この問題に脳科学の立場から迫る。

●子供の脳育て

「まず『遊』より始めよ」・・・為末大（元陸上選手）

名門校の選手：合理的に促成栽培される⇒全国大会で上位に行ける

⇒その後超一流にはなかなかいけない

スランプを迎えたときに何とかしようとしてももう間に合わない。脳と骨の使い方はそれぞれ違うので、自分と向き合って微調整する必要がある。遊びから入った人の脳は自分と対象をつなぐ情報がたくさんあるが、「よくできた型」を学んだ人にはそれがない。遊びから入った子供は使える材料が脳の中にたくさんある。20世紀は想像力ではなくて実行力が必要だった。21世紀は想像力が必要。

「監督が怒ってはいけない大会」・・・益子直美（元バレーボール選手）

責任や結果で追い詰めて暴言や暴力で追い詰めては 余計なことは考えず、がむしゃらに突き進む（20世紀はこの力が必要だった）脳神経回路を活性化するが、発想力対話力長期の戦略力（21世紀に必要）の回路を阻害する。

20世紀はがむしゃらで勝てる時代（スポーツ界もそれを良しとした）

「挑戦して失敗したことは怒らない。挑戦しなかったことは怒る」

森林 貴彦（慶応高校野球部監督）

※60代と70代の方は「俺たちの時代は」とよくいうが、その時代はもう終わっている。

今後の人間の仕事：「命題を探し出すこと」（その脳独自の発想力）とAIとのコミュニケーションに集約してくる（AIへの質問力が重要）
必要なのは発想力と対話力（デジタル人材に必要なのは、アナログ的力）

●人生が思い通りになる対話術

⇒『人の話は共感で聞く、自分の話は結論から話す』

★人間のとっさの思考回路には2種類

問題が生じたときには誰でも以下の2つ

①感情派：ことのいきさつ派

ことのいきさつを反芻してきづきをおこそうとする（「そう言えば・・・」）

②問題解決型：今できる派

今できることに意識を集中して、さっさと動き出そうとする

↑2つの思考回路は両方とも重要

※個人がどちらかの回路をもっているわけではなく、状況や立場によって両方の回路を使い分けている

・①ことのいきさつ派：共感型（思いを語る、主観） 過去、未来

感情的になることは現代社会では悪とされてきたが、感情的にならないと可能にならない脳内における演算がある。感情的になることで、記憶を再体験することにより、新たな気づきを得ることができる。

黒川氏は：感情的な人に対して 「感情でしか引き出せない演算をしているんだ・・・」という愛情をもって聞く。

感情的な人に対して、労ってあげる、共感してあげると、その人の激情が納まる

・② 今できること派：問題解決型（結論を急ぐ） 今

目の前の問題から、目をそらすことない。コミュニケーションでしたいのは問題点の指摘。①ことのいきさつ派にとっては聞くと一番イラっとする。

★①、②の回路は、対話する際に相性は最悪

①共感型は相手（②）に思いやりのなさ、人間性の欠如を感じ

②相手（①）に客観性の足りなさ、知性の足りなさを感じる

始めは形だけでも意識的に共感を示していくと、実際本当に心から共感できるようになる。

・とにかく「いいね」か「わかる」で受ける 『共感』によって、相手とのコミュニケーションの※結論から話す際にはポジティブなこと（できること）から話すwifiがつながる。反論したいことがあれば、その後に言えばいい。

・共感の言葉は、相手の言う形容詞を反復してあげる（「辛い」⇒「辛かったね」）

・共感できない場合も、「そうかー」と共感を示す

★対話には『事実の通信線』・『こころの通信線』2本ある

こころを掴んでから事実を伝える

いきなりの「ダメ」「無理」は相手の自己肯定感を下げってしまう。

⇒幸福感が下がる原因に

子どもの敵になるか、師になるかで変わってくる

※結論から話す際にはポジティブなこと（できること）から話す

★『心理的安全性』

よりよいチームには『心理的安全性』が重要

心理的安全性：言いたいことが気軽に言えると思える環境であること

(Googleの社内調査で明らかになった)

言うとなげな思いをすると感じて発言を止めると、脳は発想そのものをやめてしまう。

●人間の所作は『指先タイプ』と『手の平タイプ』がある

子どもそれぞれで「パフォーマンスを出せる所作」が違う

※運動音痴はこの世にいない、個々の所作のタイプに合った指導ができる

指導者に会えることが重要

- ・指先タイプは最初が上手くいきやすい（習得が早い）

※途中でスランプに陥るときに、投げ出す傾向がある。いったん辞めても

また戻ってくることもある。それを受け入れていることが大事。

- ・手のひらタイプはなかなか最初は上手くいかない（習得が遅い）

動き出すのに時間がかかるので、周囲をイラつかせる傾向。

しかし飽きが来ず、真面目。

↑『指先タイプ』の飽きっぽさ、『手のひらタイプ』のぐずぐずさを

理解してあげることが大事。

※憧れの人のようにできないこともたくさんある。その際には、憧れのひとができなくて、自分ができることを探す。

※本当の大人は、できない他者がいるときに、「この人にできることがあるはずだ」と考える。他社に劣等感を持たない人は、自分にも劣等感を持たない。

●失敗を未然に防ぐと脳はセンスが悪くなる

- ・脳は寝ている間に回路を書き換える
- ・失敗を重ねた分だけセンス発想力が付く

★失敗3か条

- ・失敗を他人のせいにはしない（他人の失敗にも胸を痛める）
- ・過去の失敗をくよくよ思い出さない（また同じ失敗をする）
- ・未来の失敗をぐずぐず言わない（親や指導者）

★失敗した人にかける言葉

「私も～してあげれば良かった」

⇒失敗を恐れない子どもが育つ

